

セックスに溺れる熟女 ～淫乱な叔母の白い乳房～

直輝／NAOKI

第一章

僕の母親は、僕が幼い時に僕を置いて好きな男と駆け落ちしてしまい、父から逃げ出した。そのため、僕は父と二人でずっと暮らしてきた。僕が中学生になったある日、父が女の人を家に連れてきた。そして、僕にも父にも似つかない女の人を「お前の叔母だ」といって、僕に紹介した。それが百合子さんだった。

僕が中三の時、父が五年間も刑務所に入ることになったので、僕はしばらくこの「叔母」に育てられることになった。叔母といっても、もちろん僕とは血のつながりのない他人なのだが、叔母は気さくな人で、僕と叔母はお互い気を使うことなく、普通に暮らしていた。

勉強も運動も取り立ててできなかった僕は、ごく普通の高校生であった。部活に参加することもなく、何となく退屈な高校生活を送っていた。

父が、おそらく悪いことをして僕と叔母に残していったお金があったので、経済的な負担はあまりかけてはいなかったが、もちろん、裕福ではなかった。

そんな普通の親子として仲良く生活して僕と叔母の関係が、少し変なものになったのは、僕が高校生になったときだった。

あの日、授業が終わり校舎の裏の自転車置き場で自分の自転車に跨り、自宅へと走った。

僕の家は、庭付きの古い木造二階建て。ガレージに自転車をおき、玄関の鍵を開けて僕は中に入った。上がり口にはパンプスが二足あるだけで、室内は人の気配を感じさせないぐらいシーンとしていた。叔母は外出しているようだった。

脱衣室の扉の前を通り過ぎようとした時、扉が開いているのに気づいた。

僕は扉を開けた。バスルームのドアは閉まっていたが、シャワーのしぶきが脱衣室まで弾け飛んでいた。叔母は扉をきっちり閉めないでシャワーを浴びたようだった。僕は雑巾を手にして脱衣所に足を踏み入れた。

次の瞬間、僕は、脱ぎ捨てられた叔母の服を見て仰天し、息を呑んだ。

それは叔母がよく着ている黒のスカートと白いブラウスだった。叔母の美しい姿態を思い出すなり、僕の心は妖しいときめきに支配された。

叔母はいつも短めのスカートを履いて綺麗な脚を曝け出していた。僕も時々目のやり場に困ることがある。タイトなTシャツに身を包み込んだ身体、深く括れたウエストライン、熟れきった肉感豊かな腰つきは、思春期の僕の股間に得も言えぬ刺激を与えた。

歩くたびに太腿あたりでストッキング生地のはずれ合う悩ましい音をさせながら、プリンプリンと

揺れる叔母のお尻。そのタイトスカートの上からくっきりと浮かびあがった豊かな尻肉を包んでいるパンティライン。服の下に潜む叔母のすべてが僕の淫らな性欲の対象となった。

叔母の官能的な姿態を思い出すだけで、全身が異常に火照ってきた。学生ズボンがきつく感じられるほど股間が膨らんできた。衝き上がってくる胸のざわめきを抑えつつ、隠すように上に置かれていたスカートをそっとどかしてみる。

あった……。

パンストと一緒に、白いブラジャーとパンティが潜ませてあった。

叔母の濃厚な女の臭いが染み込んだ下着を見て、僕のペニスは一気に硬くなった。胸の鼓動は外に聞こえるのではないかというくらいに鳴り響き、理性も思考力も急激に濁ってしまいわけが分からなくなった。

叔母が外から帰ってきやしないかと気が気でなかったが、込み上げてくる欲望を抑えきれなくなった僕は、ついに手をパンティに伸ばしてしまった。

それに触れたとたん、ざわめく動悸は激しくなり、クラクラする濃密な昂揚に意識もさらわれそうになりながらも、絹のようなすべすべした手触りだけはしっかり認識した。

叔母の豊満なヒップと、僕にとってはいまだ未知のものである女性器を包み込んでいた、とくに飾り気のないパンティ。

欲望に衝き動かされるままパンティを頬に近づけると、脱ぎたての汗臭さに混じって、フェロモンたっぷりの熟女の牝臭が鼻孔を刺激した。

わずかに残っていた理性をも壊されそうな激情がたちまち沸き起こり、欲望を貪るように叔母のパンティに顔を押し当てた。つんと酸っぱい熟女の香りに、ダムが決壊するように僕の理性は崩れていく。

「ああ……」

せわしなく制服のズボンをブリーフごと膝まで引き降ろすと、野太いウイナーのようなペニスが飛び出てきた。

ペニスは下腹に貼りつくほどギンギンに反り返り、亀頭もすでにヌレヌレ状態だった。

その場にひざまついて、硬直しきったペニスを握りしめた。肉茎は僕自身でもびっくりするくらい硬く、コチコチに強ばっていた。

瞼を閉じ、叔母の匂いを嗅ぎながらゆっくりと男根を握った手の上下運動を開始した。

叔母の切れ長の瞳、肉厚の唇、誇らしげに見せつける濃艶な胸、ふくよかなヒップ。叔母の悩ましいまでの姿が、くっきりと脳裏に映像を結んだ。

いきり立ったペニスの中で快楽が急激にグツグツと湧き上がってきた。あと数回しごきあげれば、確実に射精してしまうところまできた。

とっさに肉茎から手を離し、荒げる呼吸を整えた。束縛から解放された肉棒は快感に耐えているようにピクピクと痙攣していた。

たまらぬ思いで、叔母の白いパンティを高々とそり返っているペニスに被せた。

「ああ……っ」

敏感な亀頭がクロッチの裏地に柔らかく包まれるや、射精してしまうほど大きく跳ね、全身がブルブルツとした。

パンティの上から絡みつけるように肉棒を握った。獣のような息継ぎでしこった肉棒に大きなストロークを加えると、官能的で鮮烈な刺激に股間がズンズン疼いた。

すべすべしたポリエステル生地と肉竿の包皮とのこすれ具合がたまらない。

ペニスはけたたましく律動し、こらえにこらえていた快液が戸口に向かって一挙に押し寄せた。

目の前はピンク色に染まり、性感が高まって鼻息もいっそう荒々しくなっていた。

「あっ、あ……あ……出る……。ああ、出るう！」

最後は叔母のとびきり美しい姿態を脳裏に映し出しながら、何かにとり憑かれたかの勢いで、パンティの中ではち切れるほど怒張しきった肉棒を激しく扱きたてた。

烈しい性感が脳髄を貫いた瞬間、僕は大きく天を仰いで、叔母に向けられた欲望のすべてをパンティの中で爆発させた。

熱くて濃い新鮮な精液が、叔母の白いパンティを突き破るかの勢いで噴射した。あたかも叔母の体内へ射精したかの快感が全身を駆け抜けた。

めまいを起こしそうな絶頂感、生々しい脈動が伴う射精感に、僕の身体は稲妻にでも打たれたように痙攣した。

股間の筋肉がキュッと収縮し、熱くて濃い精液が、叔母の穿き古したパンティを汚してい

く。

最後の一滴まで搾り取るようにしごいた手が止まったとき、全身から力が解き放たれたように抜け、がっくりと肩を落とした。

顔が異常に熱くなり、耳鳴りがガンガンしていた。

床にひざまづいたまま、両手でパンティをそっと広げてみた。シルキーな光沢のポリエステル地の中に、生臭さが鼻につく黄色味がかかった精液が大量に溜まっていた。

オナペットと化した叔母の下着に付着した自分の体液を、虚ろな目で見つめた。

精液まみれの牡肉はにぶく光り、萎えきらない形状で性感の余震にピクピクとひきつらせていた。尖端からはまだ出きらない白濁液が流れた。

「やっちゃった……」

深い溜め息とともに切なく呟いた。叔母の下着によって、強烈な快楽を味わってしまった。

まだ女性の肌すらも触れたことがないのに、まるで叔母とセックスをしたかの充足感に満たされ、叔母に対する思い入れをますます深くした。

ペニスの根元から肛門までの筋がジーンと痺れる感覚を残したまま、しばし身動きできなかった。異常なまでの昂奮は、完全に紅潮しきった顔と、額からしたたり落ちる大粒の汗が何よりも物語っていた。

第二章

夏休みが近づいていたある日、僕はいつものように家路についた。

家に着いて玄関を開けると、見たことのない男物の靴が並べてあった。僕は音をたてないように注意しながら靴を脱ぎ、玄関をあがった。

静かに家に入っていくと、応接室で人の気配を感じたが、話し声が聞こえてこない。僕は、誰もいないのかと思い、そっと応接室の中を覗いた。

見知らぬ男がソファに深く腰掛けていて、視線を自分の足に向けていた。僕は、叔母は席を外しているのかなと思いつつ、ゆっくりと視線を落としていった。男は、上半身はシャツを着たままであったが、下半身には何も着けていなかったのである。

そして、大きく広げられた男の両足の間には、女性がひざまずいていて、その女性の頭は男の股間の上にあった。

フェラチオをしているのだ。女性の頭は小刻みに上下しており、男は息を荒げながら女性の髪を優しくなでている。

アダルトビデオの中でしか見たことのなかった行為が、目の前で、しかも自分の家の中で行なわれているのである。

下半身が疼いてペニスが勃起し、全身がカーッと熱くなった。そして、見なれた応接室の中

の行為から目を離せなくなってしまった。さらに驚いたことは、男性に奉仕しているその女性は叔母だったのである。

叔母は服を着たまま、ブラウスの前のボタンを全部開けていた。

男のペニスは叔母の頭に隠れて見えなかったが、頭の上下する様子から、叔母が激しく男性器を愛撫していることは明らかであった。

「百合子.....気持ちいいよ.....」

男は、気持ち良さそうな表情を浮かべ、叔母に小声で話しかけている。叔母はうなづき、フェラチオを続けていた。

初めて他人のセックスを目の当たりにし、しかもそれが叔母のセックスであることで、僕の興奮は最高潮に達していた。

すぐにでも自分のペニスをしごいて射精したかったが、その欲望を何とか抑えて、ズボンの上からペニスをこすりながら、応接室の二人を見つめ続けた。

「もう、挿れようか.....」

しばらくして、男が叔母に声をかけると、叔母は「はい.....」と言って、フェラチオを止めて立ち上がった。

僕の眼には、男の勃起したペニスが飛び込んできた。先端部分が大きく張り出していて、叔母の唾液で濡れていた。

他人の勃起したペニスを見たのは初めてだったが、それは、太くて長くて、たくましくそそり立

っていた。何度も女性を貫いてきたものなのだろう。女を知らない僕のペニスとは大違いだった。

男がペニスを大きく揺らしながら立ち上がると、今度は、叔母がソファに腰をおろした。叔母は両足をソファにあげて、足を大きく広げた。スカートの中から、黒い下着が見えた。

上半身は、ブラウスのボタンが外されているものの、ブラジャーは着けたままであった。叔母は巨乳だった。胸が大きいことは知っていたが、見たのはその時が初めてであった。

男はスカートの中に手を入れて、叔母の下着に手をかけた。

少し乱暴に叔母の下着をぬがせると、男は、叔母の大切な部分をしばらく覗き込んでから、叔母を見上げて「舐めるよ」と声をかけた。叔母は、恥ずかしそうに「はい」と返事をした。

「凄く濡れているね」

「いやあ.....恥ずかしいです.....」という声が僕にも聞こえた。男は、叔母の性器が既に濡れていることを指摘したのだ。

「すごくいい匂いがするよ」

「恥ずかしい.....」

男は顔を叔母の性器に近づけていった。叔母のフェラチオの時と同じように、叔母の大切な部分は、男の頭に隠れて見えなかった。

しかし、叔母の性器を舐めまわしていることは想像ができた。

「やっ.....あっ.....あああ.....」

叔母は、僕には見せたことのない気持ちよさそうな表情を浮かべながら、両手で男の頭を押さえていた。時おり、軽くのけぞるようにして、男の舌がもたらしてくれる快感を男に伝えていた。

それは、僕が想像さえしたことのない叔母の姿、性感を味わっている女の姿であった。

叔母は、優しいような、美しい顔をしていたが、その顔には、僕には見せたことのない淫靡さが浮かんでいた。

「すごい.....ピチヨ、ピチヨだ」

「いやああん、そんなっ.....あっん！」

「なんて、イヤラシイんだ.....もっと、もっと気持ちよくしてやるよ」

男は叔母への愛撫を続けた。

「やっ.....あっ.....そこっ.....あああ.....」

叔母は男の頭に手をあてがい、喘ぎ声を漏らした。

男は叔母の切ない喘ぎ声に興奮し、左右の陰唇、硬い突起と交互にせわしく舌を這わせ、吸いつづけた。

「あっ！ いやっ！ もういきそうです.....。ああっ、いくうっ！ いっちやううっ！」

叔母は身体を仰け反らせ、甲高い声をあげて身を震わせた。

叔母への愛撫を終えた男は、下半身だけ裸の状態のまま、大きなペニスを揺らしながら立ち上がった。自分のペニスを叔母の中に挿入しようとしていた。叔母もそれを受け止めようとし

ている。

僕ははいよいよ我慢できなくなり、勃起したペニスを引っ張り出してしごきながら、目の前の淫らな光景を凝視した。

勃起のたくましさを叔母に見せつけるようにしながら、男はシャツのボタンを外し、下着と共に脱ぎ捨てた。

男の裸体は中年そのもので、お世辞にも鍛え抜かれた体とはいえなかった。しかし、その股間部分からそそり立っている勃起は体とは不釣り合いなほどに力強く、その黒ずんだ色合いは、今まで貫いてきた女性の多さを物語っていた。

男は、先ほどフェラチオをされていたのと同じ態勢でソファに腰かけた。叔母は、男のペニスを見つめながら体を起こすと、男と向かい合う形で、男の腰にまたがっていった。叔母が男の上になって交わるのだ。

僕は、早くセックスを見たいと思うと同時に、叔母があんなグロテスクなペニスを受け入れてしまうのだろうか、どこか信じられない気もした。

しかし、叔母は、僕のそのような気持ちをすぐに裏切って、男の腰の上で短いスカートをまくりあげた。叔母の白く大きな尻が僕にも丸見えになった。

その態勢で、叔母は、左手を伸ばして、たくましく勃起したペニスの根元をつかむと、自らの腰を動かして、勃起の先端を自らの割れ目にこすりつけるようにした。

男のペニスにはコンドームは被せられていなかった。叔母は、何のためらいもなく、男のペニ

スを生のまま、自らの膣の中へ導こうとしていたのである。

裸の亀頭を、数回前後させて、自らの膣口にこすりつけた後、叔母は、白く柔らかそうな尻をゆっくりと下げていった。

初めに大きく張り出したエラの部分が見えなくなり、叔母の腰の動きに合わせて、ペニスの幹の部分も、叔母の性器にくわえ込まれていった。

叔母は、一番下まで尻を下ろすと、体を軽く反らせて、目を閉じて、「ああ……」と大きな呻き声をあげた。

「どうだい、百合子？」

「ああああ……いっ……いい……凄いいっ……もっとお……」

叔母は、腰をおろした状態で大きく息を吐くと、ゆっくりと腰を上げていった。男性器の幹の部分、叔母の中から再び顔を出した。白い粘液がべっとりまとわりついており、叔母の濡れた肉壺の中に挿入されていたことを物語っているようであった。

モザイクのかかったDVDしか見たことのなかった光景。僕の興奮は、叔母の体から出てきた愛液を目の当たりして、益々かき立てられた。

叔母の膣からは、かなりの愛液が出ていて、叔母が何度か腰を上下させると、男のペニスはすっかり白くなっていた。

「ああああ……い……いいい……はあっ……んっ」

叔母が腰を上下させるリズムは徐々に早くなっていき、叔母の口から発せられるあえぎ声

も、甲高いものになっていった。

男は、叔母のブラウスに手を伸ばした。ブラウスが取られると、叔母は、黒いブラジャーと、まくりあげられたスカートだけを身に着けている状態になった。

ほぼ全身が露わになった叔母の肢体は、白い肌が美しく、程よい肉づきが熟した女性の色香を醸し出していた。黒いブラジャーに包まれた乳房は、その柔らかさを伝えるように上下に波打っていた。叔母の白い尻は丸出しにされて、男のペニスを生でくわえ込んでいた。

男は、叔母の黒いブラジャーを外した。露わになった豊かな乳房がぷるんと揺れる。姿を現した乳房は真っ白で、浮き上がる血管が見えるようであった。叔母の乳房は、重みと年齢のせいで少し垂れ下がっているようだったが、乳房の先の部分は、ほとんど色素の沈殿していなかった。

叔母が腰を上下させるたびに、美しい大きな乳房が上下に大きく揺れた。男は叔母の乳房を、両手で味わうようにゆっくりと揉み始めた。

豊かな乳房は男の手に収まりきらずにあふれ出ており、柔らかい感触が男を楽しませている。男は、柔肉の感触を楽しみながら、その先端部分を口に含んだり、舌を伸ばして乳輪を舐めまわしたりし始めた。叔母は体をピクツと動かして応えている。目の前で、美しい乳房を、男がほしいままにしているのを見ていると、恨めしく思えてきた。僕は、嫉妬のような、何ともいえない感情を抱きながら自分のペニスをしごき続けた。

「はあああっ……くう……」

「百合子、この態勢がいいんだよね」

「ああう.....はい.....気持ちいいです.....あああ、あ、いいっ.....」

男が乳房を楽しんでいる間も、叔母の尻は上下し続けていた。

叔母は男が乳房を舐めやすいように、身体を前に傾けていた。それに合わせて、男は、少し足を広げる態勢になったため、挿入部分から男の陰囊まで、僕のいる場所からも、よく見えるようになった。

男の陰囊には、叔母の女性器から流れ出た白い粘液がべっとりついていてた。

卑猥な光景であった。愛液はそんなにたくさん出るものなのかと驚いた。

しかし、そのすぐ上の光景は、僕にとって一生忘れられないものであった。それは、僕が初めて見た、モザイクのない、男性器が女性器に挿入されている光景であった。

叔母の陰唇は、丸く口を開けるようにして、男のペニスをパツクリとくわえ込み、叔母の腰の運動に合わせて飲み込んだり吐き出したりしていた。しかも、そのすぐ上には、叔母の肛門がひくひくと蠢いている。

僕にとっては、叔母の尻が上がる度に、ペニスを逃がすまいと吸いつくように、叔母の陰唇が少し引っ張り出されるのが衝撃的であった。

僕は、射精が近づくと無意識にペニスをしごくスピードを緩めていたが、初めて男女の結合部分を直に見た興奮で自制を失ってしまった。僕は手の動きを速めた。

瞬間に限界が訪れ、僕は、見知らぬ男のペニスが叔母の性器に出入りする光景を凝

視しながら射精した。

クラクラするような快感が全身を貫き、僕は、いつもティッシュの中に出すよりも、かなり多くの精液を畳の上に迸らせた。

気がつくやうに、畳の上には、僕が飛ばした白濁液の筋ができていた。

長い射精の余韻がおさまると、快感がひいていくと、いつもオナニーを終えた時に感じるよりも強い虚しさが込み上げてきた。

目の前の男は、相変わらず愛液にあふれた肉壺にペニスを出し入れし、手と口では、柔らかい乳房をもてあそんでいる。

僕は、男を羨ましいと思うと同時に、早くその射精を見たい、いや見せつけられたいという、変な気持ちになっていた。

(体験版はここまでです。本編を買っていただけると嬉しいです。よろしく願いいたします。)